「笹川杯作文コンクール 2009」～中国語で応募～ 第２回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

「日本語を学ぶ農民」

浙江省　崔海波

初夏のある晩、私は鄞西の友人宅を訪ねた。ふと、隣家の戸の隙間から朗々と本を読む声が漂ってきて、更に耳を澄ましてみると、ああ、やはり外国語だ。そこで、好奇心に駆られ近づいてみた。近所の二階にある大きくもない書斎に、中年と青年の農民が十人ぐらい整然と坐っているだけだった。街から来てもらった先生に習って真面目に“わいわい、がやがや”と日本語を学んでいるところだった。ああ、自発的に集まった家庭での日本語養成教室だったのか。

日本語養成教室の発起人兼リーダーは朱さんで、学習者の多くは現地の大手イグサ栽培農家とイグサ加工企業の管理職だった。鄞州は「中国イグサの里」で、鄞州の西郷全域がイグサの主産地である。イグサ製品は主に日本で販売されるので、イグサを商う人にとって日本語は必修科目になっているのだ。

イグサはゴザ草、燈芯草とも呼ばれ、莚を作るための上等な原料である。遠く南宋初期、既に当地ではイグサを栽培して筵を作る産業が非常に盛んに行われていた。高橋の大勝の物語が今なお鄞州の西郷に広く伝わっている。南宋の初めの年、金国の軍が南へ侵攻し、宋の高宗趙構は寧波まで命からがら逃げたが、金国の騎兵はやはり徹底的に追いつめた。鄞州の西、高橋一帯では、当地の農民が金国の騎兵に対処する田舎くさい方法を考え出した。金国の騎兵が必ず通る経路上になめらかな筵を敷いたのだ。宋の高宗趙構を追って金の騎馬隊が莚の道に足を踏み入れると、軍馬が相次いで足元を狂わせ、てんやわんやの大騒ぎになり、戦わずして負けた。

それから千百年来、鄞西の農民が植えてきたのは全て当地の草で、草製品は主に莚、帽子、扇子、敷物などだった。イグサ製品は香りが良く、適度に硬さがあり、弾性に富み、引張りにも強い。中でも白麻筋の莚が最も有名である。「各家に織機があり、どこでも帽子を編んでいる」というのが、鄞西一帯で草製品加工業がもっとも盛んだったときを確実に表現している。1954 年、周恩来総理がジュネーブで開催された国際平和会議に出席した際、四十枚の白麻筋の莚を持参し国礼として各国の友人に贈り、広く称賛を受けたことが美談となっている。半世紀が過ぎたが、この件に話が及ぶたび、鄞西のイグサ農家は隠しきれぬ誇りを顔に浮かべるのだ。

1978 年、832 株の日本イグサが「中日友好の草」として鄞州に入ってきた。その時に集仕港の人民公社売面橋大隊が試験的に植えて以来、その生産高は当地の草を上回っている。しかも細くて軟らかく、長くてしなやかな特徴があるため、徐々に当地の草と取って代わり全域に広まっていった。イグサで編んだ畳を日本に売った効果と利益は見るに値する。改革開放の時期に、一部のイグサ農家は先を見越して自ら編機を買い入れ、量産した畳の輸出による外貨獲得で、真っ先に裕福になる模範となった。

朱さんは生まれも育ちも鄞西の人で、祖先は全てイグサの栽培で生計を立ててきた。改革開放の初めは彼も市場の挑戦に組みついて闘った一人で、資金をかき集めて何台もの編機を買い、細々とやっていた莚製品の生産を次第に発達させた。しかし、輸出商品の生産には三日にあげず外国商人とつきあうことが避けられない。日本語が分からなかったために、「こんにちは」、「おかけになってくださ

い」といった簡単な日常会話すら通訳を必要としていた。そこで、人について日本語を学ぼうという思いが朱さんに芽生えたのだ。

彼はわざわざ寧波の街区から日本語の先生に来てもらい、何人か当地のイグサ業者に連絡を取って、鄞州で初めての日本語養成教室を始めた。学習者たちは学びながら使い、しばらく勉学にいそしむことを経て、一応は基本的な日本語の会話が分かるようになり、日本語を操って日本の業者と話せるようになりだした。初めて日本語を使って、遠路はるばるやって来た日本の客人に挨拶したとき。その光景を思い出すと、朱さんは爽やかに感じるのだそうだ。「私が日本語で客人に挨拶をし、歓迎の意志を伝えたとき、相手は初めはぎょっとして、続いて喜んで拍手しはじめた。あのときの協業はとても楽しかったので、互いに深く印象に残っている。」

数日前、私は実際に朱さんの工場を見学し、日本のビジネスマンの畳生産ライン視察に彼が同伴しているのを目にした。しかも、慣れた日本語で客人に工場内の状況を紹介している。ちょっと前まで黄土と向き合い空に背を向けていたイグサ農家が、今や換骨奪胎して「外国語」を話せる起業家になっているのだ。

朱さんによると、彼の工場は今年、平均して毎日コンテナー杯の畳を出荷しているが、まだ需要に追いつかないのだという。客先の注文数を満たすため、一部の業務を他者に譲る必要があるそうだ。驚いたことに、取引先に付き添って自分の工場を見学し終わるなり、彼は、また慌ただしくよその工場へ視察に行った。原料の品質を確保するため、彼は近くの村の農民から 500 畝の土地を借りて質の優れたイグサの栽培拠点としている。農業、工業、貿易を一貫させた生産と販売を実行しているのだ。今はまさにイグサを刈り取る季節。鄞西の田野を歩いて目を向けると、濃緑は統一された畑にそよ風が吹き、イグサの香りが溢れる。

去年、朱さんは 20 歳の息子を日本留学に送り出した。その子が学び終えて帰国したら、新世代の農家がより抜きんでた姿で国際貿易の舞台で活躍するだろう。